

要 約

- (1) ヒメジャコの生殖巣部湿重量比は、6月が $46.0 \pm 4.8\%$ 、7月が $43.9 \pm 8.3\%$ と高い値を示し、8月には $17.4 \pm 1.7\%$ と大巾に減少した。その後9月～11月までの調査では $18.9 \sim 21.0\%$ で回復はしなかった。
- (2) ヒメジャコの定点での成長量は、穿孔生息長径値で $1.05 \sim 1.40$ cm、平均 1.23 ± 0.11 cm であったものが、4年間で $6.90 \sim 8.00$ cm、平均 7.43 ± 0.45 cm となった。
- (3) ヒメジャコの放流効果調査（放流技術開発試験）では、1980年に「埋め込み」法で放流した個体は、1981年の残存数を基準にすると1982年には $50 \sim 100\%$ 、平均 86% の率で残存していた。また人工基質への放流試験は1年後の残存率は 30% であった。
- (4) シャコガイの生息状況は、石垣島の平野、明石、白保の3ヶ所で、大型シャコガイを調査、採集した。採集された個体は、シャゴウが3.1個体、ヒレジャコ6個体そしてシラナミ2個体であった。
- (5) シャコガイの種苗生産に関する試験では、ヒメジャコを例年と同様の方法で、1mmサイズを12.9万個体生産した。シャゴウはヒメジャコの幼生飼育と同じ手法を用いて、種苗生産の予備試験をおこなった。受精後75～77日目の屋外での中間育成開始時で1mm稚貝が0.7万個体（生残率 0.9% ）生残した。
- (6) 川平湾内外におけるサンゴの生息状況は、その出現種類を調査した。種類数は65属231種であった。
- (7) 小浜島、石垣島でカタメンキンサイの生息状況調査を行ない、小浜島での生育が確認された。
- (8) 昨年鳩間島沖から移植したカタメンキンサイは移植場所及びその周辺に定着しており生長もよかった。
- (9) 1982年8月に川平湾水路部の5地点で採泥し底質の粒度組成及び塩酸処理後の残留率を調べた。同じく5地点で、1982年8月と1983年2月にベントス調査を行なった。
- (10) 保護水面区域内で、下記の項目に関する環境調査を行なった。
水温、比重、天気率、風向、栄養塩類等の水質、クロロフィル *a*、透明度。

参 考 文 献

- 日本海洋学会編（1980）：海洋環境調査法、恒星社厚生閣。
- 日本水産資源保護協会編（1980）：新編水質汚濁調査指針、恒星社厚生閣。
- 沖縄県水産試験場八重山支場（1975）：昭和49年度川平保護水面調査報告書、139pp。
- （1976）：昭和50年度同誌上、21pp。
- （1977）：昭和51年度同誌上、24pp。
- （1978）：昭和52年度同誌上、15pp。
- （1979）：昭和53年度同誌上、16pp。
- （1980）：昭和54年度同誌上、32pp。
- （1981）：昭和55年度同誌上、36pp。
- （1982）：昭和56年度同誌上、20pp。
- 村越正慶（1982）：昭和57年度日本水産学会秋季大会講演要旨集 p.39。
- SCOR-UNESCO W. G. 17(1966): *Determination of photosynthetic pigments.*

